

第二部 ミミズ酵素・ルンブロキナーゼが血栓を溶かす 第三章 薬物・食物としてのミミズ

ミミズと聞いて、漢方薬の地龍を思い浮かべる方もいらっしゃると思います。

実は地龍はミミズの皮を乾燥させたものです。薬理作用としては、血圧降下、解熱などが言われています。

博士はミミズが医薬品もしくは食品としてどのように利用されてきたのかについて調べる事にしました。

高校時代の上級生でもある九州大学文学部中国哲学の町田三郎教授に相談をしました。調べて紹介をしてくれた一つが、生薬に関する世界最古の文献である「神農本草経」でした。

原本は散逸してありませんが、中国の漢の時代に書かれたと考えられており、後の時代の復刻本から内容の研究が進んでいます。タイトルの「神農」とは、人のからだに牛の首を持つと伝えられている伝説上の神様です。

この神様が多くの植物や動物を口に入れ、それらの薬効を調べて人々に伝えていたとされ、それらをまとめたのが「神農本草経」になったと言われています。実際には漢の時代に民間伝承されていたさまざまな治療方をまとめた書物だと思われます。

驚くべきは、この書物の内容が現代の医学にも通じる所が見られる事です。西洋医学を学んだ美原博士ですが、「神農本草経」によって東洋医学にも大変興味を持つようになりました。

ミミズについて書かれている事は、死ぬとミミズ自身が持つ酵素の力で皮部分を残し溶けてしまう事（線溶活性酵素の事である）がありました。

次にどのような病気にミミズが使われていたかについても調べました。宋の時代にまとめられた「重修政和証類本草」では、中風、今で云う脳卒中を治すと書かれています。脳卒中とは、脳出血と脳梗塞を合わせた病名なので、ミミズが脳梗塞に効果的な薬効を持っていると宋の時代の書物にかかれていたのには驚きました。

ミミズの薬効の中で有名な解熱効果がありますが、大正時代、東京大学医学部の田中伴吉、額田晋の両氏による研究により、ミミズが解熱有効成分であるルンブロフェブリンと云う物質を持っている事が報告されています。

現在でも、アスピリンなどの解熱鎮痛剤にアレルギー反応を起こす患者さんには、代わりに地龍が解熱剤として処方される事が有る様ですから、臨床的にも確かな薬効が認められて使われています。

インドでも伝承されるミミズの効能がありました。民間療法を集めた古典に精力剤として有効であると載っていました。全身的に血液の流れを改善する力がインドでは精力剤の効果として伝承されたのでしょう。

ミミズに関する文献を調べると、食用としても利用されている事がわかってきました。

東北帝国大学教授の畑井新喜司氏が昭和6年に刊行された「みみず」と云う本の中で食用としてのミミズの事を書いています。ニュージーランドのマリオ族がミミズを食用としていた事が書かれています。

食用ミミズは8種類あり、そのうちの2種類はあまりにも美味しいので酋長だけが食べられる物として保護されていたと書かれています。

ミミズの味は元より、薬効が、密かに酋長を虜にしていたのではないかと美原博士は推測しています。

どうでしょうか？ミミズが食料とされているとしてもあの姿を見てしまうと、あれをそのまま食する事はちょっと出来ませんよね！？ところで、ミミズのもっている力の中に“何かを溶かす”ことがあって、それが血流に関係することを知っていた古代の人々の知恵と経験に驚きます。今回は線溶活性物質、ミミズ酵素のルンブロキナーゼの発見です。